

幻の総合商社 鈴木商店とは



大正 5 年当時の鈴木商店本店

大正期に日本一の年商を誇った
“幻の総合商社”

大正 4(1915)年 11 月、大番頭の金子直吉は「天下三分の宣誓書」をもって「三井、三菱を圧倒するか、然らざるも彼等と並んで天下を三分するか、これ鈴木商店全員の理想とする所なり」と発し大正 6(1917)年の鈴木商店の売上は当時の GNP の 1 割に匹敵し、日本一の総合商社となる。

鈴木商店は明治 7(1874)年に洋糖業を開業した。当時神戸は開港間もない頃であり、金子直吉は外国人居留地にて海外の商品・技術にいち早く触れる一方、外国商館の高圧的な態度に屈辱と日本の地位の低さを痛感し、以来、金子の思想の根底には常に国益志向が溢れる。

明治 27(1894)年、店主岩治郎の急逝により、「お家さん」と夫人の鈴木よねは経営の一切を金子と柳田富士松の両番頭に託す。金子は樟脳の相場に失敗するが、よねは咎めることをせず、金子は鈴木家に対する忠誠心を強める。鈴木商店の第一の飛躍は、下関条約により台湾が日本領土となり鈴木商店が台湾樟脳油の販売権を獲得した時である。この時台湾総督府民生長官である後藤新平と出会う。また土佐出身であることから浜口雄幸らとの親交を深め、金子は政商と呼ばれるようになる。

歴史の教科書にもある通り、日本は日清戦争から日露戦争にかけて軽工業から重工業中心の経済発展を遂げていく。鈴木商店もまた同様の道を辿り、製糖、樟脳、薄荷からセルロイド、鉄鋼、造船、人絹など重工業へと多角化していき、製造業を次々と立ち上げたことから、金子は「煙突男」とも呼ばれるようになる。その猛烈ぶりには渋沢栄一でさえ「(金子直吉は) 事業家としては天才的だ」と言わしめた。

第一次世界大戦が勃発すると金子は戦争の長期化を予測して「一斉買い出動」の指令を発し、その後価格が暴騰し鈴木商店は大躍進する。そしてロンドンの高畑誠一は

「大英帝国といえども鈴木にとっては一介の客に過ぎぬ」と物資調達に悩む連合国を相手に強気のビジネスを展開し、船舶、食料などを大量に供給する。大戦中、鈴木商店は輸出を通じて膨大な外貨を日本に持ち込み、日本は開国以来初めて純債務国から純債権国に転じ、名実ともに先進国の仲間入りを果たすことになる。一方で新興企業の、そのあまりの急成長ぶりは妬みを買ひ、鈴木商店は大正 7(1918)年の米騒動の際に風説の流布と暴動の衝動性から本店焼き打ちという悲劇に見舞われる。

大戦が終結すると、わが国には反動不況が襲いかかり、それまでのインフレからデフレの時代に突入し、鈴木商店の急拡大策も裏目に出てしまう。鈴木商店は海軍拡張計画（八八艦隊計画）を機に挽回を試みるも、大正 11(1922)年のワシントン海軍軍縮会議により頓挫。翌年の関東大震災が苦境に拍車をかけた。そして昭和 2(1927)年、鈴木商店は破綻してしまう。

鈴木商店は破綻したものの、高畑誠一、永井幸太郎を中心に日商（後・日商岩井、現・双日）を設立。また金子直吉は昭和 6(1931)年以降、太陽曹達（後・太陽産業、現・太陽鉱工）にて鈴木家再興の夢に向けて、後に「中小炭鉱の雄」と称される羽幌炭砒鉄道、日沙商会、日本輪業ゴム（現・ニチリン）、鈴木薄荷など 20 有余の直営会社、関係会社を擁するに至り、かつての「煙突男」金子の老いてなお盛んな自業意欲を偲ぶことができる。

金子直吉は戦時中（昭和 19 年）に死去するが、神戸製鋼所、帝人などの企業は自主再建を遂げ、現在のニッポン、J-オイルミルズ、ダイセル、出光興産（元・昭和シェル石油）、サッポロビールなども鈴木商店を源流とし、現在も日本をリードする一流企業として活躍している。

金子 直吉

かねこ なおきち

生年 慶応 2(1866)年 6 月 13 日
没年 昭和 19(1944)年 2 月 27 日
享年 77 歳



資源のない日本が世界に
伍して行くためには、
工業と貿易の興隆が不可欠

高知県吾川郡名野川村（現・吾川郡仁淀川町）に生れ、明治維新において貨幣経済等の混乱期に親の家業（呉服反物を扱う店）は破綻し、6 歳ごろから高知市に移り住む。長屋での極貧生活を余儀なくされ、紙くず拾いで一家の生計を支え、もちろん学校へは行っていない。鈴木商店に入店する前の 10 年間の丁稚奉公時代に奉公先を転々としたが、高知市農人町の傍士久万次質店で落ち着き働く傍ら質草の本を貪り読み、ありとあらゆる膨大な知識を身につける。（金子自身は「質屋大学」と呼んでいる）金子が 20 歳の明治 19(1886)年、傍士氏の推薦によって鈴木商店に入店した。

店主鈴木岩治郎が没した明治 27(1894)年、よね未亡人を助け柳田富士松とともに番頭として実質の経営にあたるようになり、樟脳事業を担当すると明治 32(1899)年には台湾樟脳油の販売権の 65%を得るまでになり、金子は国内外に事業を展開し、鈴木商店の大躍進を見たのである。以後、金子は「生産こそ最も尊い経済活動」という信念のもとに「煙突男」と揶揄されるほどまっしぐらに工場建設に邁進し、傘下企業のほとんどが生産工場という内訳であり、金子が築いた大正期の産業の母体として鉄鋼、造船、石炭、化学、繊維から食品に至るまでの 80 社を超える一大コンツェルンを形成した。

昭和 2(1927)年に鈴木商店が破綻した後、金子は太陽曹達（後・太陽産業、現・太陽鋳工）にて鈴木家再興の夢に向けて、羽幌炭砒鉄道、日沙商会、日本輪業ゴム（現・ニチリン）、鈴木薄荷などを復活あるいは設立し、20 有余の直営会社、関係会社を擁するに至る。

昭和 4(1929)年に刊行された「財界人物我観」の中で福澤桃介（福澤諭吉の女婿で明治・大正期の実業家）は、土佐出身の我が国経済界を代表する二人の人物を紹介している、一人は岩崎弥太郎であり、もう一人は金子直吉であるとし、三菱の創始者である岩崎よりも金子を高

く評価し、金子の事業は優れた人間性、スケールの大きさから他の追随を許さぬほど国益志向に徹し、我が国の基礎産業に先鞭をつけたと言う。そして、「我が国におけるナポレオンに比すべき英雄」（財界のナポレオン）と称えた。また、渋沢栄一は「金子は正規の学問こそないが、道理を知るにはよほど明らかで、事業家としては天才的だ」と評している。その他、昭和 42(1967)年に開催された神戸開港百年祭の時に当時の原口市長から授与された顕彰状の一節では次のように称えられた。「あなたは神戸に一大総合商社を育てあげ、今日の港都繁栄はあなたの功績によるところまことに顕著なものがあります」

「無欲恬淡」金子の人柄を表すこれ以上の表現は見当たらない。公私にわたり無欲で、金子の念頭にあるのは「事業」のみ、私利私欲は微塵もない。終生借家住まいで一文の私財も残さず、昭和 2(1927)年、鈴木商店破綻により台湾銀行による鈴木整理に当たって、金子のあまりに質素な生活ぶりに台湾銀行関係者は驚きと深い畏敬の念を抱いたといわれている。

また、金子は多くの人材を育てた。北村徳太郎（播磨造船所支配人、運輸・大蔵大臣）は「金子直吉は大教育者であった。人間形成の土台をよく見て、あいつはこういう風に仕向けろというわけです。えらい教育者であった。」

金子は事業にのめりこむことで妻の顔を忘れてしまうというエピソードがあるが、休日には狩猟と釣り、俳句を愛した。俳句は妻の徳の影響でもあるが、自ら俳号を「白鼠」（白鼠は主家に献身的な家僕を意味する）と称し、その時代や当時の鈴木商店の状況、自身の心境から多くの俳句を詠んでいる。代表的なものとして、「初夢や太閤秀吉那翁（ナポレオン）」や先祖の武将元宅へ向けた絶唱「天正の矢叫びを啼（な）け時鳥（ホトトギス）」など数多くある。

2025 年 9 月 27 日 鈴木商店記念館